

五回

人生の贈りもの

田舎に隠居 変わらぬ価値を問う

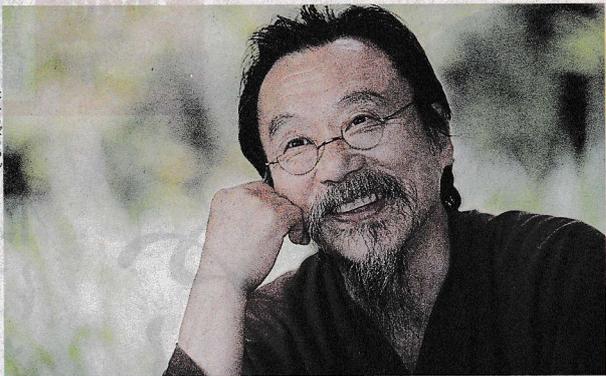
〈吉左衛門を息子に譲り、戸籍名を直入に変えて2年が過ぎた〉

京都から若狭へ向かう山中、小さな集落で一人で暮らし始めて2年になります。テレビなく、ラジカセも新聞も、それに携帯もない。一緒にいるのは愛犬だけ。コロナ禍は世間との縁をさらに薄くしました。無精鬚は胸近くに迫り、面白半分、生まれて初めて伸びた鬚のことを聞かれたら、「仙人修行中」と答えましょう。

社会の中で、人はどこか自分の役割を求め、演じているようです。役割に乖離あれば辛い人生になり、生きがいとなれば充実した人生となる。今は、隠居を演じている。ならば自問しなければ

陶芸家(15代樂吉左衛門)

樂 直入 ①



「久多叢芒庵」に隠居して2年が過ぎた。京都府京都市左京区、滝沢美穂子撮影

りません。「隠居とは何者ぞ」と。〈秋にはススキが穂を揺らす〉

僕は27歳の時、樂家に戻りました。最初にしたことは、田舎に土地を持つこと。以来この地は、己をとり戻す場所となりました。

京都市上京区にあり、400年の歴史を持つ自宅は、先祖の息づかいに満ち、伝統の重みが肩にのし掛かります。「つぶされるものか!」って土を握る。軋轢や葛藤があつてこそ、打ち破ろうとする創作の力は沸点に達します。

だから田舎では作陶はできませんでした。あまりにも平和で美しいから。でも、隠居後はこちらで作陶ができる。忘れられたようなこの場所についてこそ、現代文明の欲

望と対峙できる。進歩や発展とは異なる価値観です。

ここは季節と共に、全ては同じように繰り返される。都市文明は常に新しさを求め、僕の創作も激しく挑んできた。果たしてそれでいいのか。田舎から見えてくる別の世界がある。つまり、変わらぬ価値とは何かと問うことです。

(聞き手・西田健作 全14回)

らく・じきこゆう 1949年生まれ。東京芸術大学を卒業後、81年に15代樂吉左衛門を襲名。伝統に根ざしながらも独自の造形美を追究し、高く評価される。2019年に隠居。10月13日から京都高島屋で16代の襲名披露展が始まる。